

特別支援教育の可能性や今後のあり方について  
討論したシンポジウム＝2日、福井大文京キャンパス



## 特別支援教育を討論 福井大で

福井市の福井大附属特別支援学校は2日、自閉症などを抱えた卒業生4人の巣立つまでの様子を当時の担任らが共同執筆した「ゆっくり、じっくりスローライフ教育 生活・手づくり・共同の12年で育つ」を発売。同大文京キャンパスで出版記念シンポジウムを開き、障害児を持つ家族ら約100人が、特別支援教育のあり方について考えた。シンポジウムは、障害児教育を専門とする福井大の教員4人が討論。松

木健一教授は「特別支援学校では長く子どもと関わり、その子が持っている力に添った教育ができる。社会と切り離された教育がなされ、1年単位で区切られてしまう学校教育の課題を克服する可能性がある」とした。同特別支援学校の前校長でもある熊谷高幸教授は「子どもの生活に根ざした教育を行い、育ちに合せて教師がじっくり課題に取り組むのが、スローライフ教育。形にしようと思わず、目に見えない『耕し』を積み重ね、先を見据えた教育を行うことが大事」と話した。

# スピー

## SLTら集会

語指導助手（ALT）や福井大留学生らと歌やゲームを通じて触れ合った。

れ、体育館と教室で交流を深めた。ヘネシー・ロバートさんは、母国アイランドの場所や食文化などを、イラストなどを見せながら、すべて英語のクイズ形式で紹介。児童たちは、ジャガイモを毎日食べると聞いて「え

話していた。山田花梨さん（5年）は「先生とのクイズやダンスが楽しかった。もっと英語をしゃべりたい」と一緒に遊びたいと話していた。

「ゆっくり」に登場する卒業生や保護者4人による討論もあり、子どもの世界が広がるにつれ支援の必要性が増すことや、在学中の思い出などを語った。